地方会

第41回日本小児外科学会北陸地方会

会期：平成23年9月3日（土）
会場：金沢医科大学前療4F臨床研究センターカンファレンスルーム
会長：河野美幸（金沢医科大学）

一般演題

1. 当科における過去10年間の超低出生体重児腸疾患
手術症例の検討
金沢医科大学小児外科
桑原 強、安井良倫、押切幸博、増山宏明、河野美幸

【はじめに】低出生体重児の腸疾患で手術適応となるのは壞死性腸炎、限局性腸穿孔、胎便関連性腸症候群に伴う穿孔などであり、その多くは腸瘻造設による治療が行われている。最近10年間（2001年〜2011年7月）で経験した超低出生体重児で腸疾患に対して手術が行われた症例を振り返り検討した。

【結果】症例は9例（男児5例、女児4例）で平均出生体重は735g。死亡は3例で、2例が搬送症例であった。リスクファクターとして、脳出血・感染症の合併がみられた。

【まとめ】脳出血合併や感染症の合併や、搬送や手術日齢が遅くなるほど救命率の低下に繋がり、生命予後に関連する合併症をもつような超低出生体重児、可能な限り穿孔期の早期対処（搬送・手術）が救命率の向上に繋がると考えられる。

2. ストーマ合併症からみた低出生体重児に対するストーマ造設術の検討
富山大学医学部附属産科第2外科小児外科
同 副院長薬学研究部消化器・腸瘻・総合外科（附属病院第2外科）

廣川慎一郎, 渡邊哲子, 塚田一博

低出生体重児のストーマ造設では全身状態の不安定性や未熟性、脆弱性など対応が重要となる。管理しやすいストーマ造設のため、ストーマ合併症からみた低出生体重児に対するストーマ造設術の検討した。

【結果】救命優先で造設された小腸ストーマでは自由度が低くストーマの高さが確保できない場合が多く、ストーマ周囲皮膚炎発症、創開離、ストーマの脱出、観血ヘルニア、小腸穿孔の形成と脆弱性皮膚への対応に難渋した。術式として残存腸の温存のために、ループ型、分離型回腸ストーマおよびカテーテル膿などの併用の選択が有用であった。また多発奇形症例で腸瘻ヘルニアがある場合には、腸部ストーマ造設は有効な管理方法と判断された。手術創の位置と連動した創傷管理、ストーマケアを組織的に行わせることで、ストーマ閉鎖術へスムーズに移行可能であった。

3. 当院における長期留置型小児中心静脈カテーテル挿入の現状
金沢大学小児外科
同 消化器・乳腺・移植再生外科
酒井清祥, 宮本正雄, 谷 晃, 藤村 隆

【はじめに】小児の悪性腫瘍や重症疾患における中心静脈カテーテルは重要薬の注入や栄養点滴だけでなく、採血ルートとしても有効であり、治療には不可欠である。疾患によっては数か月から数年間の長期留置が必要となり、カテーテルの留置部位やトラブルは児童のQOLを大きく左右する。当科では長期留置が必要な児童にHickman catheterを第一選択として使用しており、児童の年齢、体型、病状に応じて挿入方法を変更している。挿入血管は外頸静脈、鎖骨静脈、横側静脈等を使用しており、穿刺法やカットダウン法を用いている。2010年4月から2011年7月まで38症例に対して施行しており、各挿入法の問題点もふまえて当科の現状を報告する。

4. 小児外科領域での合成皮膚表面接着剤（ダーマボンド®）を用いた手術創閉鎖に関する検討
藤田保健衛生大学小児外科
鈴木達也, 原原二夫, 日比将人, 加藤充雄

最近我々は合成皮膚表面接着剤（ダーマボンド®）を用いることにより、積極的に適応を広げて真皮埋没縫合による手術創閉鎖を行っているのでその有用性について検討し報告する。対象は当科で2011年4月から7月までの4か月間に施行した手術症例81例中ダーマボンド®を使用した63例とした。症例の内訳は、術中ヘリニア、陰嚢水腫および留置栄養管が34例、腹腔鏡下膿瘻切除9例、腫瘻切除9例、腹圧発生術切開2例、十二指腸膿瘻締合、人工肛門閉鎖後、眼窩骨奇形、切開創閉鎖術各1例、その他4例であった。このうち、開放による切創切除、人工肛門閉鎖後および切開創閉鎖術の3例において創感染を認め、他症例では創部の固定、被覆において良好な結果であった。

NII-Electronic Library Service